断簡三

仏陀かく説き給う。

「死は自然なことである。

草花が散って枯れるように。

それが土に還って地を肥沃にし、優しい雨が降る。滋味豊かな土が雨にて柔らかく湿り、種は養分を吸って健やかに発芽する。

数日前まで小さな芽に過ぎなかったそれが日々移り変わりて葉の繁る草となり、やがて花を咲かせる。

汝は今死に瀕して己の営みを顧み、すべて虚しかりしと想え、あれほど夢中になっていたことへの興味も喪い、親兄弟すら立ち入れぬ昏き穴に独り落ちていかねばならず、親兄弟の言葉すら空々しく感じ、すべての現実が乖離して映じ、友人や家族も信じられず、孤独と不信に苛まれている。

死は自然である。

すなわちそれに反する想いは辜负である。魂を裂いて苦痛の轍を刻む。

なぜ虚しく想うのか。それは汝の大切に想うたものが喪われ、叶えられぬからだ。すべて生き続けることを前提にして成り立つ価値観に過ぎないからだ。

すなわちそれが反自然である。そのような想いから去れば、心は平安を取り戻す。この生の刹那、えにしによりて廻り逢えた家族を奇しく想う暖かみが心に灯され、現象にしからざる虚しさを覚りながらも哀切に想うであろう。

さて、汝は心魂に安心をくださいと言った。だから私はかくの如く説いた。汝は汝の望むがままに為す。それにいかなるいわれもない。心から欲することを為せ」

叭羅蜜斗は本を擲って言った。

「バカバカしい。長い人生、死の一瞬に照準を合わせて生きろって言うのか。呑んで喰らって歌って笑い、生きる。欲望し、無我夢中になる。闘って勝利する爽快。輝く肉体、健全なる古代高貴なる力の世界。それが生というものさ」

真兮はパイプに葉を詰めながら、

「そうでもないさ。サムライのごとく常住坐臥、死を想って清々しく生きていれば、心に煩いなく、清く軽く爽やかに日々生きていける」